

議事

1. コミュニティ・スクールについて
2. 学力向上の取組について
3. その他（第2回会議について）

議事録

（開会）

総務課長
（進行）

皆さんこんにちは。1分ほど前ですけれども、ほぼ定刻になりましたので、令和元年度第1回西海市総合教育会議を始めさせていただきたいと思えます。まずは開会に当たりまして杉澤市長よりご挨拶を申し上げます。よろしくお願ひします。

市長

皆さんこんにちは。開会に当たりまして一言ご挨拶申し上げます。教育委員の皆様方におかれましては、お忙しい中、貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございます。本日は令和に入って初めての総合教育会議ということで、前回はですね、公民館活動ということで、皆様に色々な貴重なご意見をいただきました。その中で地域がですね、やはり少子高齢化とともに、地域の人材が固定化しているんじゃないかというような話もございました。今日はコミュニティ・スクールということで、皆様方と協議をしていきたいと思えますけれども、コミュニティ・スクールにつきましては、ご承知のことと思えますけれども、学校と保護者、地域がともに知恵を出し合って、協働しながら子供たちの豊かな成長を支えていくということでありまして、昨年度、大瀬戸小学校におきまして、西海市初のコミュニティ・スクールとして活動しているところであります。

教育を通じて人づくりを目指すために、皆様と今日ご一緒に協議していきたいと思っておりますので、どうか限られた時間でございませうけれども、よろしくお願ひいたします。簡単ではございませうけれども、挨拶といたします。

総務課長

ありがとうございます。本日の会議ですけれども、一応、目途といたしまして、午後2時45分までには終了したいと思っておりますので、ご協力のほどよろしくお願ひいたします。それでは早速議事に移りたいと存じますが、ここから先の進行は市長にお願ひしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

市長

本日は教育委員会より、「コミュニティ・スクールについて」及び「学力向上の取組について」の議題をいただいております。まずコミュニティ・スクールにつきましては、学校教育課のほうから説明をお願ひいたします。

学校教育課長

学校教育課からコミュニティ・スクールにつきまして説明をさせていただきます。資料としましては、クリップで留めているんですけど、A4用紙1枚が、本資料でございまして、あと両面印刷で資料No.が右肩に付いているものを附属の資料として説明をさせていただきます。10分程度説明をさせていただきます。

まず、本資料の方の1枚もの、黒ダイヤが四つありますが、最初は上の二つについて説明をさせていただきます。

先ほど市長さんからもお話がありましたが、西海市におきましては、市内の初めてのコミュニティ・スクールの研究指定ということで、大瀬戸小学校を昨年度から研究指定校としてその研究が始まっております。研究指定の中で、二つ目の白丸なんですけど、学校運営協議会設置等に係る規則等の整備を昨年度行いました。と申しますのも、コミュニティ・スクールというのはと聞かれたら、定義としましては、「学校運営協議会が設置された学校」という定義がなされています。その運営協議会をもとに地域と学校が「地域とともにある学校づくり」を進めていくというところからでございます。令和元年度にコミュニティ・スクールとして指定をいたしております。

そして、学校運営協議会の委員につきましては、今現在15名なんですけど、そこに示されている、通学区域内の地域住民、在籍する児童または生徒の保護者、校長、教職員、学識経験者その他の教育委員会及び当該指定校の校長が認める者ということで、15名の運営協議会の委員を決めております。

では、ここでこのコミュニティ・スクールとは何なのかっていうことを少し詳しく説明させていただきます。資料の1ページ右上にNo.1と書いてあるところの1番上にコミュニティ・スクールの目的が書いてあります。学校、保護者、地域の方々が教育目標やビジョンを共有して子供の教育を行い、地域とともにある学校づくりのために協働する、ひいては学校を核とした地域づくりを狙っていく。つまり、地域とともにある学校、あわせて地域づくり、コミュニティの活性化というところも目的に入っております。

続きまして次のページをお開きください。そこで、3番に大瀬戸小学校で研究して行うことについてということが書いてありますが、なぜ大瀬戸小学校にコミュニティ・スクールの設置に至ったかっていうところの説明ですけども、学校の統合によりまして、地域に学校がなくなった寂しくなったという声もございました。拡大した校区においても、学校と地域が連携して、その地域とともにある学校づくりというようなことができるんだよっていか、進めてまいりましょうという立場から、大瀬戸小学校にコミュニティ・スクールを導入することが始まりました。

それにはもともとそれぞれの各地区、例えば多良良であるとか、檜浦のどんばんさん、松島の桜まつりですとかそういった地域に根ざした、子供と一緒に地域とともに動くそんな土台がありましたので、それを校区の中のそれ

それぞれの地域が交流しながらということが可能になるのではないかとということからのスタートでございました。

コミュニティ・スクールが活性化していけば、地域が学校にいろんな教育活動に協力をしてくださる。また、学校が地域に、具体的には、例えば多良良の子供たちが、大瀬戸の檜浦で行っているとんぼんさんに参加をすとか、みんなで松島の桜まつりに参加すとか、そういった動きもあって、地域がより活性化するのではないかとというものでございます。

さらに、4ページをお開きください。4ページには、今年度から始まっています学校運営協議会で、新たに4月23日に決定してるんですが、地域の中でともに子供たちを育むということで、どんなメッセージを発信し、どんな子供たちを育てるかということを経験会で共通理解をいたしました。

大きく4点、優しい心、創造する力、伝統守る力、やり抜く力、これは地域で育むときもこの視点から声をかけよう、学校でも地域の方がこういうところで見守ってくださるといことも含めて指導を一緒にやっということで決定をしているところでございます。

さらに、長崎県の貴重な資料がありまして、No.6になります。カラー版の資料をごらんください。これは県教委が、平成29年4月に出了ましたリーフレットでございますが、長崎版のコミュニティ・スクールについてです。1ページをごらんください。コミュニティ・スクールにはどんな効果があるのか、大きく三つ示してあります。

一つ目は持続可能な仕組みであるということ。教職員の人事異動があっても運営協議会の存在があるから、学校と地域の組織的な連携が継続できるということ。

二つ目は、社会総がかりでの教育であります。学校運営協議会、先ほどの大瀬戸小で決めました子供たちへのメッセージもその一つだと思んですが、地域と学校が同じ歩みができるということ。

3番目、目標ビジョンを共有した協働ができるということ。校長が作成する学校運営の基本方針について、学校運営協議会は承認をいたします。

学校経営目標等を共通理解することで、やはり先ほどのメッセージと併せて、子供たちが共通の視点で関わりを持ってもらえる、育めるそういう良さがございます。さらにこれはですね、資料のカラー刷りの4ページをご覧ください。この資料は長崎県で初めてコミュニティ・スクールとなりました壱岐市立の霞翠（かすい）小学校の取組をもとにした資料でございます。

先ほどからお話をしています学校運営協議会ではですね、その黄色い丸のところ。霞翠っ子育成協議会、このように各学校で名前は変えていいですよということになってますので、これが学校運営協議会でございます。それを話し合いの中に、右に地域の枠がありますが、地域からもその運営協議会の委員として入られ、保護者代表として左側の家庭から入られ、そして上

にある学校の職員も入りながら一緒に歩みを進めております。

下に霞翠っ子育成協議会の年間計画がありますが、5月には、運営協議会のスタートがなされて、6月の教育週間、そして学校の活動に対する協力、そして2月、3月には1年間を振り返って次の年につなげる。また、真ん中の写真のところにはですね、会議のちょっと小さくて見えにくいんですけども、その様子が示されてあります。

それではまた本資料のほうに戻りたいと思います。あと二つの黒ダイヤがあります。西海市におけるコミュニティ・スクールの指定校の設置計画案を紹介してあります。現在令和元年度ですので、大瀬戸小学校の1校のみでございまして、次年度は、この大瀬戸小学校の今年までの歩みを全ての市内の学校の職員に紹介をし、それに基づいて各地区1校ずつできないかと考えております。令和5年度までには全ての学校にコミュニティ・スクールをということで計画をしながら動いているところでございます。

成果と課題です。成果が2点、課題が2点と考えています。大瀬戸小学校のコミュニティ・スクールは、先ほどメッセージとして紹介しましたけれども、会議を定期的に行い、順調にスタートを切っているところです。

また、具体的な例として、会議の中で運動会の地域種目の実施について意見を交換したり、先ほど紹介した子供たちへのメッセージを3回4回変更しながら、より良いものに話し合いを進めるというような具体的な活動も見られております。

課題としては、ここで別紙資料の6ページをご覧くださいんですけども、コミュニティ・スクールの取組を図にあらわして、左側に学校、そして右側に地域という図がございます。学校の下に学校運営協議会がございます。地域と学校が連携するということで地域にも窓口、地域にもそういう活動をする部分が必要だということで、地域の下に書いてある地域学校協働本部というものがございます。

現在、大瀬戸小学校は学校運営協議会がありますが、まだこの地域学校協働本部という具体的なですね、その地域はどういう集団でどなたがっていうところまで明確に設定するところまでには至っておりません。今後連携をしていく上では、地域のこういった活動をされるのか、誰がその窓口になるのかとか、そういったものを明確にしていく必要があるかなと思うのが一つの課題、2点目には、次の7ページの資料にあるんですけども、学校には似たような複数の会議体がございます。7ページの横置き資料をご覧くださいと、1番下のほうにあります。これまで矢印これからって書いてあるところに、これまでのところに学校評議員会、学校関係者評価委員会、学校支援会議の会議体っていうのが、同じ会議をするものでも同一の方が入っておられたり、複数の会議に共通していらっしゃる方もおられます。そういったその会議体の整理統合が必要だと、これは全国的にも言われているところ

でございます。

具体的には、今、大瀬戸小学校には学校運営協議会が立ち上がりまして、資料のもう1枚めくっていただいて8ページをご覧ください。学校評議員会と学校運営協議会の主な役割、設置、運営、任命といったところで比較をしております。目的の主な役割というところで見ますと、学校評議員っていうのは、学校運営に関し意見を述べるというところでは、学校運営協議会の委員と大変似ているところもございます。今後、学校評議員会の皆様とも話をしながら、もし可能であれば、もう学校運営協議会の中に例えば学校評議員さんが入っておられるというところを確認しながらですね、統合ができないものか。学校評議員会は一応廃止にするという形で、どうかということもですね検討してまいりたいと思っております。足早でございますけれども、以上コミュニティ・スクールについてご説明させていただきました。

市長

ありがとうございます。今のですね、本当、駆け足での説明があったと思うんですが、やはり次からですよ、教育委員の皆様方には事前に何か資料をね。そういう資料をですね、ちょっと調べるような時間をとっていただければと私の意見でございますけども、よろしく願いいたします。

説明をいただきましたけれども、これにつきまして、何かご意見等がありませんでしょうか。

寺本委員

寺本です。西海市の風土といいましょうか、例えば登下校の見守りなんかは、地域の人がかかりこう力を入れてやってくださってる。そういう面では、コミュニティ・スクールを市内全体に広げていくことは、割としやすい土壤があるのが西海市かなと思います。ただ、今日午前中も教育委員会の中で、適正配置の話があったんですが、そういうことを話し合っていく中で、協力体制はあるんですが、資料の1のコミュニティ・スクールの目的の中に、「学校、保護者、地域の方々が教育目標やビジョンを共有して、子供の教育を行い」と、この子供の教育を行うという、そこが中心なのでそれを外して、その学校のことを語っていくと適正配置で随分ひっかかっているところは、地域が寂しくなる、情としてはよく分かります。ただ、子供たちがどういう教育を受けられるかっていうことを保障するかという地域の大人の責任というものがなかなかそこで浮き彫りになってこない。

その中で、適正配置の中で今回の大瀬戸から離れた雪浦だって一緒にならなかったじゃないかっていう意見も提示されてました。区長さんの中からですね。でも、雪浦はこのコミュニティ・スクールの学校運営協議会という組織こそないけど、地域でやっぱり子供たちの教育のことに非常に協力的、熱心にやろうとしておる、自分たちの何ていうかノスタルジーというか思い出

だけで、雪浦小学校を統合させないと言われたわけじゃないんですよ。何かそこら辺はきちっと学校を囲む我々大人が把握していかないと自分たちの思いだけを中心にする、コミュニティ・スクールも、子供のことを語りながら子供のことが忘れられてるっていう形になるっていうことだけは気をつけていかなければならんことだなあと考えております。

市長

今の学校の統廃合、適正配置の件ですね、今、残ってるところがですね小学校区で大崎地区のところだけというふうに、それからまた、雪浦小学校のことも出ましたけれども。雪浦小学校、これをどうするのかというような、これもこれから上がってくるんじゃないかというふうに考えております。

今、おっしゃられたようにですね、私も思うんですけど、地域と学校が一体となって、これを運営して行く。それは、ひいては地域づくりに寄与していくというところは、もうこれからなくてはならない形かなというふうに思いながらですね、やはり寺本委員が言われたようにですね、その中でひょっとしたらこう大人のエゴが入ってるんじゃないかなというふうに、結局大人の思いだけはちょっと強過ぎないかなというふうなところだと思うんですけども。これからですね、そういう意見も確かにございます。私はそこでどうのこうのということはないのですけども、それも含めまして、何か他にありましたら。

北島委員

少し説明をお願いしたいなというふうに思ってます。基本的にコミュニティ・スクールの概要ですとか体制というのは大体わかってきたわけなんですけれども。大瀬戸小学校においては、30年度より、運営協議会が開始されて、今年4月の協議会が9回ということですので、もう既に、昨年度8回開催されているのかなというふうに思うわけですね。そういった中でその8回を通して、学校と地域と、あるいはPTAとどういうやりとりがあったのか。具体的に例えば学校側から運営協議会のほうに何かお願いするような連携することがあったのか。あるいは今後のやって行きたいこととして、どういう要望があったのか。また地域のほうからは、それに対してどういった協力が得られるようなことなのか、少し具体的な、昨年の動きっていうのを少し説明していただければなというふうに思いますけど。

学校教育課長

今のご質問にお答えしたいと思います。昨年その8回については、これが運営協議会には規則ができるまでは、まだ運営協議会にはなりませんので、その8回は準備会ということで準備委員の皆さんに、もっと多くの方に入ってくださいました。今、運営協議会の委員は15名なんですけれども、実際にその準備会に参加いただいた方は30名ほどおられました。その中には、例えば学童保育の代表の方ですとか、婦人部の方ですとかいろんな地域の方、さ

らに広げてですねいろんなご意見をいただくということで行いました。

どんな活動というか最初どうだったかという、まずはやはりコミュニティ・スクールっていうのは何なのかというのがやっぱりスタートでございました。そこで、第2回の時にですね、長崎大学の畑中准教授をですね、講師として呼びまして、畑中先生に「コミュニティ・スクールとは」っていうことで、他の地域のコミュニティ・スクールの例を挙げながら説明いただいて、少しずつコミュニティ・スクールに向けて自分たちは何をすればいいのかっていうのが見えてきたように思います。

実際、その中で我々は、例えばその婦人部で子供たちの生活を見守っているし、あるいは朝の、先ほど寺本委員さんからも話があったように、見守り活動、そういう朝の登下校の見守りもできている。そういう自分たちがまずできることは何なのかっていうのを出し合いました。ただそれじゃあコミュニティ・スクールとして、何が今までと違うのかっていうご意見もありました。

そういった中で生まれたのがやはり、これまでの、校長が作っていた学校の経営目標と一緒に共有をして、学校はどんな教育をしようとしてるかっていうことの共通理解が必要だという意見が出まして、その話合いの中で、学校経営目標を受けたこのコミュニティ・スクールの学校運営協議会、この協議会の中で同じ目標で子供を育もうよと。何を目指すかっていうところで生まれてきたのが、先ほどのメッセージでございます。このメッセージは、運営協議会ではなくて準備委員会の時から作り始めております。

この資料の中にも示しておりますけれども、1番最初の第1次案ができたのが、この資料の中の1月27日でございます。これが仮となっておりますが、この3ページ目の仮から次のページに行きますと、また1月の決議されたものから第9回の4月、これが変更されて今各テーマになっているんですけど、こういった共通の目標を決めました。

どんな活動かということで、今年その運営協議会となって、夜の会合をしていたんですけど、実際子供たちの姿を見ないと、動けないんじゃないかという意見がありまして、初めて昼の会議が開催されました。その昼の会は、教育週間、学校公開週間に運営協議会の日をあてまして、まずはそこで協議会をして、今後の取組とか話し合った後に、子供たちの様子を見ようと。今我々が立てているメッセージと子供たちはどういった状況の段階にあるのか、ここに重点を当てなきゃいけないんじゃないかとか、そういう声を聞くためのものとしてやりました。運動会のことでも先ほどの例で言いましたけれども、何か一つの形としてせつかく運営協議会があるんだから、運動会に地域の種目を入れようということになって、今年度初めてその話合いがされました。具体的な活動としてはそういう流れでございますが、いかがでしょうか。

北島委員

ありがとうございます。今後ですねその運営協議会の、対話からですね、今後についてはどういった運営協議会、あるいはコミュニティ・スクールということを生かしたですね、例えば学校づくりあるいは地域づくり、この辺の議論といいますか、そういった意見とかは出てきておりませんか。あるいは、今後目指すような、こういったところを目指していこうと。何か一つの指針ではないですけども、そういった指標みたいなもので出来ているようでしたら、議論がされているようでしたら教えてください。

川南委員

北島委員から今後どうしたらいいかっていう意見が出ました。今から話し合われることかと思うんですが、やっぱり学校教育の流れの中で、教育は学校だけではしないってということで、コミュニティ・スクールというふうな流れが出来てきましたが、教育目標を共有して、同じ目標で子供たちを地域と学校で育てていくってということに対して、例えば話合いの中で、学校は主に子供たちに何を伝えるのか、地域は主に子供たちに何を伝えるのか。それから学校と地域とが一緒になって何を伝えていこうとしているのかっていうことが大事になってくると思うんですけども、北島委員の意見と併せて、そういうところがどのように進んで行くのかっていうことも教えていただければと思います。よろしくお願いします。

学校教育課長

ありがとうございます。先ほどの霞翠小学校の資料の4ページを見ていただいてよろしいでしょうか。この4ページの上のほうにある霞翠っ子育成協議会の組織図、この形が一つの理想的な形になっているのかなと思っています。運営協議会の右側に地域がございます。その中に地域の実際に関わる中にサポート部とか企画広報部ですね、連携推進部っていう大きく三つの部に分かれているかと思います。

その下にそれぞれの基になる団体がございます。青少年の健全育成協ですか老人会だとか、まずは地域でどういった協力を一緒に学校の運営をする団体があるのかっていうのを整理をした上で、自分たちは何をするんだっていうところまでができ上がれば、動きっていうのは、更に活性化がなされると思うのですが、今のところでは、まだそこまでの組織をつくるころまでは至っていません。

実際にこの紹介の中で、この地域の企画広報部の中の霞翠どんぐり隊スタッフっていうのがありますが、このどんぐり隊スタッフは実際に調理しています。子供たちを集めて、調理の会を開いたり、一緒に遊ぶ会を企画されたり、ただ大瀬戸小学校にも、低学年の昔遊びをするときには、地域の方が色々けん玉ですとか、こま回しとか、そういったご指導にもゲストティーチャーでたくさん来てくださるんですよ。そういった具体的な形はあるので、

何ができるかっていうことを考えながら、こんな、大まかでもいいですので、こんな組織ができるように、全体で言いますと地域学校協働本部になるようなものがあれば、更に進むのかなというのが今の現状でございます。

北島委員

よろしいですか。確認の意味を込めてですけど。実はですね、ずっとこう、今回のこの枠組みも含めながら考えてきたときに、従来と変わってないんですよ。学校を中心として地域があったり親がいたり、いわゆる歴史もあったり、それを脈々と実は人も、子供たちもたくさんいたりとかしたときにはそれが自然に行われてきてたわけですね。それこそ西海市内のいろんな学校の中で農業体験をですね、地域のお年寄りが一緒になってしていただいたりとかですね、それこそ、大島西小学校で僕も関わりましたけどビオトープをですね、老人会の皆さんと一緒に一生懸命になって作っていったりとかですね。

ところが、やはりそういった地域も少しずつ過疎化や、高齢化っていうところもあって、脆弱になって来てる、つながりも弱くなって来ている。その中で学校を取り巻く関係者の皆さんとの、なかなかその連携も少しずつ薄まっていく中で、古くからの日本のよさであるコミュニティーですねまさに。

そういったものをここに長崎県の資料の中で1ページ目に書いてあります、人事異動があっても、この学校運営協議会の存在によってそのまま協働体制が継続できる。ここを作りたい、作れば、そういう本当に一つのモデルになっていけば体制になって行けばっていうところが、まずは今そのスタートした上での目標でしょうか。これ確認なんですけども。重ねて申し上げますと、今やろうとしている形はこれまでもずっと厳然としてこうあったと思うんですよね。それを、一つの座組みといいますか枠組みとしてしっかり役割分担ですとか、協力体制の有り様、そしてそこにコーディネーターを置いて順調に円滑に進めていくような、そういう仕組みというものをきちんと作りながら、永続的な学校運営をやっていければというところが、そういう捉え方したほうがわかりやすいんでしょうかね、新しいことっていうことじゃなくてですね。

学校教育課長

はい、ありがとうございます。逆に今のご意見で整理していただいてありがとうございます。実際、今までも先ほど遊びのことで協力いただいたんですよって説明の中にもあったように、地域に協力していただいていることはたくさんありまして、今までも類似したことはあったと思います。ただ統合、統廃合が進む中で、校区が広がって、今までだったら自分の家のすぐ近くに学校があって、元々いつも会う子供たちの地域としての取組もしやすかったところが、校区が広がって、さらに人が少なくなってっていう課題の中でも同じような仕組みで対応するためには、こういった枠組みを新たに形成しな

がら、確固たるものにすることが必要なのかなど。学校のためにも地域のためにもそれがきつと有効に働くということでの取組だと思って、学校教育課でも実際進めているところでございます。

市長

はい、ありがとうございます。私のほうから一つ、今日の資料No. 1のですね、6ページのほうに今回のコミュニティ・スクールですね、形として示されているんですが、ちょっとお聞きしたいのはですね、地域学校協働本部のここまでもまだ至ってないという意見ですね。これをですね、やはりこれを作っていくには、先ほどいろんな昔遊びとかですね、そういうものを地域の知恵を、これからずっと保管していかなければならないというようなことだと思うんですが、西海市の中にはですね、色々そういう地域の個人的なご支援というのがたくさんあると思うんですよね。これを作っていくときに、まず地域のほうに任せるんじゃないくて、学校のほうがどういう地域の人のたちのですね、こういう資源があるのかということですね、まず把握していかなきゃならないと思うんですが、そういうところはどういうふうにご考えておられるのでしょうか。

学校教育課長

市長さんが言われたこの資料の3ページをちょっと見ていただいてよろしいでしょうか。この3ページにはどんな準備が必要なのっていうことでまとめられております。その中に地域という枠が右側の上から3番目がございます。その中でやはり必要なのが地域の実態の把握で地域への周知、地域支援ボランティアの活用、地域学校協働本部との連携とございます。やっぱり実態把握が第1でそれを学校がどうアプローチをしながら情報収集してってということが大事だと思ってます。

学校側には学校側のコーディネーターが居て、地域のほうには地域コーディネーターという方がそれぞれが窓口になって、その情報共有もしましよっていうのはあるんですけど、今その地域コーディネーターは決定しております。佐々木さんがしてくださっていますので、その地域コーディネーターと情報共有はしっかりできておまして、あとは今、地域の実態の把握をしながら、学校側としては、地域コーディネーターを窓口にしながら情報を集めると。地域コーディネーターもそういう情報を集めていただいて紹介をする。そういうことで今のところは進めておりますが、まだまだ立ち上げられていないということは十分じゃないのかなという反省もしているところでございます。

市長

今あれですね、大瀬戸小学校の部分でのお話だと思うんですが、これをですね、やっぱり全市的に広げていこうというところにあるならば、当然そこは例えば保護者がなければならぬと、順序だと思うんですね。これからの

ことも考えたときにですね、まず、ほかの学校にこれを広げていくときに、たまたま大瀬戸小学校区では、佐々木さんという方がおられたと。地域のコーディネーターになられる方がですね。他のところというのはなかなかそれを各学校も把握しているのかということですよ。その部分をまずやはりここは自分たちの地域がどういう、個人的な資源があるんだろうかということですね、しっかり捉えていかないと。最初ですね、職員の人事異動があってもこれずっと継続的にこれやっというところとありますので、それは学校のほうとしてもしっかりと地域の実態というのを、まずはしっかり掴んでおかなきゃならないと思うんですね、そういうところがやっぱり学校側の働きかけというのは大事だと思うんですが。もう一度ちょっとそういうところをお聞きしたいと思います。

学校教育課長 はい、ありがとうございます。実は先ほど類似した会議体があるっていう説明の中に学校支援会議っていうものをお示しいたしました。学校支援会議というのが実はその長崎県では、地域の方が学校と一緒に力を協力しながらともにやっというところと、これを類似した目標の中でやってきたものがありました。その主管課はですね社会教育課なんですけれども、私たちが地域との連携を考える上では、今市長さんがおっしゃってくださった地域の実態を把握する、よく知る、学校側も積極的に働きかけるっていうことをですね、とても大事だと思いますので、社会教育課と学校教育課も委員会の中では協力しながら、今あるその地域で学校を支えてくださっているそういう団体、その情報も把握をしながら、こういった形でそれをコミュニティ・スクールに移行していくのかっていうところを進めていく必要があるかなと改めて今思ったところでした。

北島委員 学校を中心としたこの学校運営協議会、あるいはそのコミュニティ・スクールという概念っていうのが一つあるという中でですね、ちょっと地域づくりの話をしていただきたいとか問題提起したいんですけども。やはりその、地域側のほうも、高齢化や過疎化っていうのはどんどん進んでいく中で、地域力であったりコミュニティ力であったり、こういったものが薄れていっているわけですね。そういう意味でもこのコミュニティ・スクールの概念である学校運営協議会っていうのは、地域における地域力の要素でも同時にあると思うんですが、そういう意味で、以前ですね、教育会議でもちょっとお話しさせていただいたことがあります、国としても進めている地域運営協議会、これは長崎県のほうでは、佐世保、長崎、平戸ですか、そういったところでも、設置のほうが進んでおるということでもありましたし、まさにその中身っていうのは学校運営協議会の構成要素、要因に殆どかぶっていきような形もあるので、一つ、西海市としては学校を中心としたコミュ

ニティづくりを進めてはおりますが、同時にやはりそこに従来、本来であれば、まさにそちらのほうが基盤である地域の運営の形といいますか、そういったところも併せ持って今後考えていくことで、まさにその市長部局との連携っていうところ、目標というところにもなってくるかと思えますし、今後の地域づくりの中核といいますか、そういったところにもなっていくような運営体になっていくのかなっていう気もちよっとしておるんですが、市長としてはそのあたりどんなふうにお考えか。

市長

今の地域運営協議会という言葉が出ましたけれども、実はあの、西海市のほうもですね、今年からこの地域運営協議会の設置に向けまして動いて行くところがございます。今年の活動といいますか事業は、地域運営協議会とは何ぞやと、これ、今日のコミュニティ・スクールとは何ぞやということは一緒なんですけども、なかなかこう、地域づくりというような何かぼや一っとしてる部分がありまして、地域の中で、自分たちの地域を自分たちがどうやって作っていくのかということをごすね、やはり皆さん方にしっかりと知っていただくために、地域の中で今まで市のほうに道路側溝とか何かこうしてとかありますけれども、一応それは申請を上げて、またそれを市のほうが現場に行ってそれを補修するとかという形だったんですが、でも結構それでも時間がかかるということで、地域の中でもできる部分があれば地域の中でやっていけるというような一つの地域の自治組織ですよ。こういう形で作っていく必要があるんじゃないかということで、最終的には、交付金かなんかで結局地域の中を自治組織として運営していただくということを考えているところで。今年は先進市視察をすね、自治会の行政区長様方を中心に1回勉強していただいて、自分たちの地域ではどういうことができるんだろうかということですが、まず知ってもらうことで自分たちの区域がそれぞれ特色ありますので、自分たちのところだったらこういうことも出来るんじゃないかというような、まずそういうことをやっていただく、自分たちの地域をまず皆さん方が知っていただいて、どういう可能性があるのかということをごすね、今年から各地区で考えていただきたいと思っておるところでございます。来年あたりはモデル地区を2、3カ所作って、そこそこで、地域のほうで運営していただくというような方法とっております。

今、北島委員が言われたようにすね、そういういろんな方と連携していたほうがいわゆる強いんじゃないかなという思いがありますので、これは学校教育課と思うんです。そういうところはしっかりと話しながら、また子ども課もかぶってくるんです。社会教育課と、これも関わってくるし、なかなかコミュニティ・スクールというのが出てくれば、どうしてもその学校教育課という形になってしまうんですが、実はそうじゃそうじゃないんじゃないかなという部分がありますので、私もこの、地域運営協議会すね、こ

れにつきましては、非常に私も期待しているところでありましたけれども、今年から早速動き出しておりますので。

北島委員

ありがとうございます。たまたまタイミングで同時にですね、こういった協議会が立ち上がっていくというのは非常にいいことではないかなというふうに思うわけです。逆に言えば地域というふうな考え方で言えば、今、市長がお考えになってそれぞれ進めていらっしゃる地域運営協議会の中の教育部会が、このコミュニティ・スクールであればいいと思うし、前回の議論にもなりました各公民館活動、こういったところもその中に一つあればいい。つまり、人がほんとにいない中で、一人一人いろんな役どころするんじゃないくて、少数精鋭で運営できるような地域協議会という大きな屋根ができてというか屋台骨ができて、そこにさまざまな活動が教育であったりとか、地域のそういった公民館活動であったりとか、いう形の中で、やればいいのかというふうに思って聞いておりました。是非いい連携を、社会教育も併せてなんですけど、お願いできればと思っております。

川南委員

今のコミュニティ・スクールから地域へと話が広がって、学校だけではなく地域だけではなくってというところで総合的に考えていくべきと思いますが、ただ子供たちや寺本委員が最初に言われた今からどういう教育を子供たちに受けさせたいか。また子供たちは何を願っているのか。子供たちはどのようにしたいと思っているのか。私達が今協議するとき、大人だけで協議をしています。だから地域に子供を、地域の力を借りれるというふうに表現をしながら話合いを進めています。高齢化だったり過疎化だったりする地域の中で子供たちは何ができるのかということ、頭の中に入れて、大人は子供の育ちの道筋を担っていくわけですけども、やっぱりそのところで子供たちの育ちを含めて、もちろんネットの中に入ってると思うんですが、きめ細かに子供たちの育ちのステップアップを考えながら交流を深めていったり、学校から地域への流れ、地域から学校への流れっていうようなものも含めて、丁寧に協議をして、コミュニティ・スクールは発車してほしいなって思ってます。

市長

今日ですね、コミュニティ・スクールについての協議ということで、教育委員の皆様方のコミュニティ・スクール、この取組自体にはどうなんでしょう。これを積極的にやってほしいという思いです。それも前提として行きますと、これからどうやってこれを上手に動かしていくかということだと思っております。やはりあの最初の何でも一つのものを作り出す時には最初の取っ掛かりが1番大切でありましてですね、今日のいろんなご意見が出てきてるわけですけども、やはりあの、川南委員からも出てきました、

最初学校は何を伝えるのかと、そしてまた地域は何を伝えるのか、そして学校と地域は何を伝えるか。何をということと誰にということは結局、子供たちだと思うんですね。これをどうやって学校の責任、地域の責任としてですね、子供たちに伝えていくのかというのが本当一番の問題だと思しますので、これは当初こうやってこのコミュニティ・スクールを進めてほしいというですね、そういう中で一つご意見をいただければと思いますが。

村山委員

ずっとお話聞いておりました、私の中で思うことはですね、やはり学校と地域と同じ目標で共有し合って、地域づくりをするってことですけど、その大きなやはり何ですかね、つなぐものとしてやっぱり保護者の力っていいのか、保護者の意識もやっぱり強くないとうまく回らないのかなと思うんですね。ですので、今回その運営委員会にも保護者のPTA会長さんとか入ってるんですけども、現に今も学校運営協議会のようなものがどこの学校にもありますが、結局そのPTAの本部とかにならないとですね、実際保護者のほうも地域とつながって活動してるかっていうのも、把握ができていない保護者が多いような現状の中、今こういう新しい形をまたして今までとどう違うかっていうことを保護者がどれくらい理解できるのかなって思うんですね。

やはりうまく回っていくには、保護者の方々もうまく巻き込むような形を考えた方がいいんじゃないかなと思って聞いておりました。年間計画とかの中でもですね、PTAのほんの一部の人が話合いに参加するのではなく、地域の行事とかにも保護者も一緒に活動できるよう、保護者がコミュニティ・スクールってどんなものか、実際、それと地域とうまくつながっていくには、保護者が興味を持ってもらうような内容を話合いにどんどん入れていっていただけたらいいんじゃないかなと思います。

市長

今のコミュニティ・スクールがですね学校と地域、もちろん地域の中に保護者が入ってるわけですけど、やはり何か保護者というですね、あるいはなかなかちょっとこう、あまり見えてないのかなってというのが私もそう思います。

最初ですね、寺本委員のですね、地域の人達と親のですね、気持ちというのは、少しちょっと別のものがあるんじゃないかと私もそう思います。そういう中でですね、当然、この地域の中には保護者というのは当然入っているわけでありましてですね。やはり地域を考える場合ですよ、やはりそのもう少し保護者という部分ですね、もう少し前面に出すような形でやってみたらどうかなというふうに私は思っています。

寺本委員

そういうこと大切だと思います。具体的な話として、今日の午前中の教育

委員会でも出たんですが、その、スマホ、SNS等の便利な部分と弊害の部分が語られてました。

例えば家庭の中でも、何々ちゃんも持ってるし何々ちゃんも持ってるし、持たないの僕だけよっていう形でどンドンこう、本当に必要なのかどうなのか、家庭でも語られることなく、そういうものが進んでいって、いろんなトラブルが起こってくる。また睡眠不足や学習不足も起こってくる。そういうことも、その家庭だけの問題じゃなくて、地域の人にも本当にこういうことを取り組もうとしとるんだというようなことができますね、伝わっていくいい場としてこの学校運営協議会なり、コミュニティ・スクールという形で、問題が共有でき、一緒に取り組めると思い、今のスマホの問題はほんの1例ですが。

何か、そのことも考えやすい、具体的に言うと、僕は基本的には、中学生にスマホという高級ゲーム機を与える必要はないと思うんです。その理由づけに、何かあったときの連絡だけ出来る携帯電話ってあるわけですよ。でも、何か押し切られて連絡という名目の中で、SNSのゲーム等ができるという、そして家庭の中でも約束を決めましょうって言うけど、やっぱりこっそりやって寝不足になっていくっていうようなことも含めてですね。それが、本当に、地域とも共有できたら別にスマホじゃなくて困ったときは連絡ができる分だけでいいよねって、みんなでその問題が共有できると、本当、スクラム組んで越えられる問題もたくさんあるんじゃないかなと期待して。スマホはほんの1例ですが、そういうようなことを期待しています。

市長 教育長から何か。

教育長 分かりやすい説明で。皆さんの意見を伺っていたわけですけど、せっかくコミュニティ・スクールを作るならば形骸化しないように役に立つようにしないといけないと思います。今の大瀬戸小学校のようにですね。

8ページの学校運営協議会の三つの役割ですね。これをきちんと押さえるのが大事だと思います。一つ目は校長が作成する学校運営の基本方針を承認するということですから、これはもう、何と申しますか、目標を共有ですね。目標を共有して進みますということですし、二つ目も学校運営に関する意見を教育委員会または校長に述べるので、みんなで共通理解して進む、目標達成するためには、この二つを蔑ろとか疎かにしちゃだめだと思うんですよね。そこからみんなスタートすると。

三つ目。三つ目がだんだん、なんていうかですね。三つ目が教育現場がアレルギーを示したところで、教職員の任用に関して教育委員会規則に定める事項について校長を通じて教育委員会に意見を述べるができるっていうんですけど、これはもう、人事権を持っているのは県教育委員会ですから、

県教育委員会に、例えばうちの学校には部活動がよくできる先生をくださいとかですね、そういうことを述べる機会ができたってということです。

それから、1番2番ですね、まずは最初ここをしっかりと押さえてやっていただきたいのと、もう一つはコミュニティ・スクールじゃなくて、スクールコミュニティじゃないかという方もいらっしゃるんですよ、寺本さんの意見とか子供中心で考えれば、スクールコミュニティをつくり上げた後、コミュニティ・スクール、地域のほうに派生していくんじゃないかという意見もございます。そういうことを考えましてもですね、余り長くしゃべってもなんですけど、私、このコミュニティ・スクールを通じて子供については、ふるさとを好きになる子供づくりにつなげていけないかなあと考えてます。コミュニティ・スクールで大事にされました、教えてもらいました、自分たちも役に立ちましたとか、そういう何か人と人をつなぐ機会の創出というかそういう器になるんじゃないかなと。最近の私の最も言いたいことは、ふるさと好きな西海の子供をつくりたいっていうのを宣言していますんで、それを達成するための器にもなればいいと思って。今後もですね、学校教育課を中心に強く進めていきたいと思っております。

市長

すばらしいまとめで、ありがとうございます。いずれにしてもですね、前に戻りますけれども、校長がこれまでですね、それに対する学校経営目標ですね、これは地域とともに作って行って、地域と目標を共有するところ。どのようにしてまず、形として立ち上げるかということですね、ここは1番大事だと思いますので、これからですね、すばらしい取組、当然そうなんですけど、これからの未来に向けてですね、これから、ちょっと必要な一つの形態だろうと思いますので、是非ですね、西海市ならではのこのような教育環境をつくっていただきたいというふうに思っております。何とかこれ1回まとめなきゃいかんもんですから、こういうことでちょっとまとめさせていただいて、次によろしいでしょうか。時間の制約もあるということで。次に、今日はもう一つ学力向上の取組ということでご説明を学校教育課のほうからお願いいたします。

学校教育課長

また先ほどのコミュニティ・スクールと同じで1枚ものの資料と、それから資料番号が書いてある資料が両面印刷でしているものがあると思います。ご準備ください。それでは、学力向上の取組について説明をさせていただきます。また10分弱ということで。今度は少しでもゆっくりになるような説明になればと思っています。まず本資料のほうを見てくださいと、また黒ダイヤが二つありますが、最初の平成30年度のところの学力向上の取組というところでまず説明をさせていただきます。そのために、資料のNo.1のところのもう一つの添付する資料をもとに説明をさせていただきます。

西海市A Iプランというのを昨年度から取り組み始めています。柱は三つありまして二重四角で囲んでいるものが柱でございます。学力向上プロジェクトというもので、主に学力向上推進会議でどんな取組を進めるかっていう会議を3回開いております。その下にはプロジェクトチームもありまして、各地区の小中学校の先生方が集まって、各地区で同じ取組を進めて子供たちを地域でも同じ視点で育てていこうということで話し合ってる検討チーム等もございます。2番目に、右側の学力向上支援事業というものがございまして、中心が学力向上スーパーバイザー、昨年度から配置いただいています。小学校2名、中学校1名、計3名、そして、いろんな研修会と下にあります英語検定、漢字検定の実施でございます。漢字は小学校の高学年、英語検定は中学校全学年でございます。そして最後に三つ目の二重四角の市学力調査の委託事業でございます。これが基本的にA Iプラン、これをもとに学力向上を進めています。

ページをお開きください。資料のNo.2は、実際に、先ほど説明した昨年度から取り組んでいる一つの検定の結果を示したものでございます。資料の見方としましては、例えば漢字検定結果の分析のところでは5年生は、5級6級7級、級数の説明は下に書いてありますが、例えば、7級であれば4年生の終了程度の内容です。実際に受験者数とその級を1年間で受けた数、そして合格した者が隣の合格者数で合格率を示しています。この中には2回受ける機会がありますので、複数で入っているということを御承知おきください。中学校が右の3ページにございます。これが漢字検定、英語検定。これは確実にですね、その合格率が伸びております。次のページをごらんください。次のページは、今年度から資料No.3は、今年度から取組を始めている学びの土台づくり推進事業のもとになる資料でございまして、子供たちにどんな力を育むのかということを示したものです。上に、西海市A Iプラン、先ほど説明をしたA Iプランがありまして、そのA Iプランの土台となる形で、全ての教科に通ずる書く活動を中心とした表現力、それから子供たちが学級で学び合いますので、認め合う高めあう学びができるような学級集団づくり、この二つを大きく、力をつけようということでの学びの土台づくり推進事業が始まっています。

具体的な内容は右のNo.4の資料の中に書いてあります。先ほど教育委員会のときちょっと話しましたが、学習院大学の先生、佐藤学先生から講演をいただいたり、佐賀大学の達富先生から具体的な授業の指導をいただいています。最後に、No.5なんですけれども、6ページからは、小学校の五、六年生以上にですね、全面実施ということになりますプログラミング教育です。そこにプログラミング教育とは何か、これ報道でもなされていると思いますが、決してコンピューターを動かす力がメインではありませんで、子供たちに、二つ目の四角のほうに書いて下線を引いておりますが、論理的に考えて

いく力を育むためにこのプログラミング教育が重要だというふうに言われて、これが導入されるものでございます。基本的にこんな資料があったんだなっていうことを頭に思い浮かべながら、説明をさせていただきます。では本資料の1枚もののペーパーをごらんください。

30年度の取組としまして、黒ダイヤの一つ目なんですけれども、先ほどお話をしましたAIプランで学力向上プロジェクト、それから学力向上支援事業、学力向上スーパーバイザーの配置で、スーパーバイザーさんは、全ての学校の個別の授業を1時間授業を見た後、この授業をさらによくするために具体的な指導をされています。それから三つ目の〇なんですけれども、市の学力調査事業で学力調査を市独自のもの、それからハイパーQUテストを実施しています。成果と課題としてまとめています。成果としては、これは、実際に具体的にですねスーパーバイザーが授業を見ておりますので、年間を通した指導の中で教師の授業力は間違いなく、例えばめあてをしっかりと子供に持たせているとか、板書をないがしろにせず、その時間で必要なものを学ばせるということで、向上が見られるということでございます。

家庭学習の充実では、各地区で先ほど小中連携した取組を話し合いをしていますって言いましたけれども、一つの具体的な例としましては、例えば西彼地区においては、小学生が自主学習でやったノートを中学校でも見せてこんな上手な自主学習といいましょうか有効なですね、自主学習がなされている。逆に中学生のノートも小学生に見せながら憧れを持たせて、自分が中学生になったときにはというイメージを持たせるような取組を進めています。漢字検定、英語検定の取組で、家で漢字検定のためにちょっと勉強しようとか英語のために勉強しようっていう子供も見られ始めたという声も聞いております。そういった意味で、1番の目的は、学習意欲の向上ですので、その点での向上が見られると思っています。

課題としては1点。各学力調査の結果から文章で説明をするというところが西海市全体の課題であります。もちろん書ける子供もいるんでしょうけれども、全体的には書くことの力をさらにつけたい、それは先ほどの書く活動を中心とした表現力の育成という学びの土台づくり事業につながっています。令和元年度の取組としまして、平成30年度の課題、何回も繰り返しますが、書く力を中心とした表現する力、それから認め合い高め合う学級集団づくりということでの取組を進めてまいります。8月22日に佐藤学先生の講演会をする予定でございますし、達富先生が関わってくださっている西海東小学校を中心にした国語の授業研究中心の授業研究会を秋に実施する予定でございます。そこに市内全校から職員が見に行きまして、自分たちの学校に生かしていくと。そして、講演を聞いた上で、どんな取組を各校でやるかっていうことを進めてまいります。

最後に今後なんですけれども、学力向上対策の成果をさらに上げるため

に、実は現段階で市の学力調査、県の学力調査、今日教育委員会でご報告をさせていただきました全国学力学習状況調査の状況としましては、全体的には子供たちの学力の伸びが見られるという結果がございます。国や県の平均正答率と比べてプラスっていうところまではいかないまでも子供たちは昨年度よりも向上している結果が見られますので、さらにその成果を得るために、先ほどから説明をしておりますA Iプラン、それから新たに取り組んでいる学びの土台づくり推進事業の充実を進めたいと思っています。また、学力向上スーパーバイザーや学習支援や人的支援ですねこれらの有効活用しながら、また限られた人数でございますので、配置の工夫もしつつ進めていきたいと思っています。

二つ目の白丸で、I C T機器は例えば電子黒板を代表的に考えてですね、いろんな機器を配置いただいています。またI C Tサポート員もとても学校からありがたいと、このI C T機器を活用する授業に生かすためにも重要だということで声を聞いてますが、その有効活用という改善が最終的には授業が変わらないとですね。電子黒板を動かすということではないので。授業改善を進めたい。また、先ほど説明をしましたプログラミング教育の導入に向けてですね、子供たちに論理的思考を育むための環境を整備するための機器導入についての検討も進めていかねばならないと思っていますところがございます。少しゆっくり目に話したつもりですが、足早ですいませんよろしくお願いたします。

市長

それでは学力向上についてですね、学校教育課のほうから、説明いただきました。これにつきまして何かご質問、お聞きしたいことございませんか。

北島委員

実際その教育論という、本当、専門家の皆さんがおられる中で、ちょっと別の角度から少し感じるところをお話をさせてもらいたいなと思うんですが、その学力っていう形で、どうしてもその点数的なものを見がちだというところがあるんですが、本来その学力って何だろうってなったときに、言葉どおりでいうと、学ぶ力っていうことになります。それはやはり聞くことであったり、理解することであったりっていうことも含めたところかなというふうにも思いますし、それはひいては人間力にやはり通じるところにもらってくるんじゃないかなっていうところを非常に感じるわけです。

ハイパーQ Uテスト等でもですね、そういったその生活習慣ですとか、生活態度、こういったところも図りながらということではありますが、どうしても今の風潮の中でいわゆる学力偏重の流れというのはどうしても否めざるを得ません。否めないと思います。そういった中で、今後その西海市の教育として、いかにそこに人間味といいますか、人間力、こういったところを加味していくかっていうところが本当は実は問われているのかなと思いま

す。今一生懸命その正答率を競い合ってるわけなんですけど、もはやもうその時代は、過去のものになってくるわけですね。知識についてもそうですね、今知ってることはもう、あまり意味がありません。ほぼあらゆるものが全て調べられると。スマホ一つあれば全て調べる。そこからどう何を構築するかとか、何を思考する、論理的に考えていけるのかと言ったようなところから、独創性とか創造力とかが問われる社会になってくるのかなと、今の我々私には想像できないような社会がやってくるのかなというふうに思っておりますので、将来この地域を担っていく子供たちを育てるためにもそうした人間力という部分をですね、どうそこに考えていくのかということも同時にあわせて大事な課題なのかなというふうに私ちょっと考えております。

学校教育課長

はい、この頃ですね、その校長会でも話をするんですが、我々が子供たちを育むときに、今度、新学習指導要領が全面実施となりますけれども、その中で言われているのが、予測困難な社会になってくる。子供たちが大人になるとときには予測困難な社会、その時、その社会で生き抜くための力を子供たちに育まねばならないと、これが究極の目的でありますっていうことは共通理解をしているところでございます。

そのためにやはり、文科省も言ってるんですけども、何のために学ぶのか、何をどのようになっていくところを考えながら進めていかねばならない一つの形としてアクティブラーニングっていうことで、何かそういう困難に立ち向かったときに、子供たちが自分で突破口を開けるような情報を集められるような、そんな力を身につけさせたいっていうふうに、それは常々思っているところであります。

一応平均正答率もですね、あくまで市全体の平均正答率は全体の中であって、各学校のばらつきも見えませんが、その中で個人に至れば、その子供が出来ることを言ってるのかもしれない。だから個は見えないので、必ず最終的には個を見ましょう。最終的に平均正答率ということで資料の中では判断をします。ただし、子供たちに、できれば平均正答率よりも下がってるっていうよりも、上がって、さらに意欲を高めるっていうこともありますので、そういった意味からも話をしています。先ほどいただいた言葉ですね、我々も大事にしながら、教育に当たっていかなければならないと改めて思ったところです。

教育長

今おっしゃってもらったことは私も常日頃ですね、知徳体っていうんですけど、わざと徳知体っていうんですよ。やっぱり知だけじゃだめです徳があるっての知ですよって言うんですけど、さらに私の好きな言葉に徳無き教育は知恵のある悪魔を作るっていう言葉もございますので、じゃどうすればいいって言いますとさっきのふるさと教育につながるんですよ。

ふるさとをまず知りましょう、ふるさとを知って、ふるさとで何かしましょう、祭りに参加しましょう、農作物をつくりましょう、何かしましょう、最後はふるさとに帰ることができないかなっていうふうにつながるんですけど、今、勉強に例えますと、知って生かす段階ですよ。知って生かすことによって徳が生まれると思うんです。

先日の人権のつどいでも自分のために学ぶんじゃない。学んだことを人のために活用するために学んだということもあったんですよ。するとやっぱり子供たちが自分の力を活用できるのは、ふるさとの中、地域の中じゃないかと思えますんで、そういうところとつなげながらですね、知と徳の、徳と知のバランスのとれた子供を育てていきたい。そのためには繰り返すと、ふるさと教育を大切にしていきたいと思っております。

川南委員

今、教育長の話聞いて、とてもうれしく思いました。私この前オランダの教育の話聞く機会がありまして、日本はもう本当に、要らない機器が普及し、何でも子供たちが知ろうとする答えが指1本で出てくるって。それから、人生の答えがこの心の中にあるんじゃないかって、機械の中にある現実ですって。教育長は、心を大事にしてふるさとを愛する教育、子供たちをつくりたいっておっしゃいました。本当に西海市は、いい教育を受けられるところじゃないかなと思います。その上でそういうことを勉強してる中で、計算の答えがはっきりしたり、人と関わる力とか、それから、漢字の表現がしっかりできるようになるって。副産物でそういうことになるっていうすばらしいことじゃないかなと思います。よろしくお願いいたします。

寺本委員

先ほどお三方が語ってくださったように、特に北島委員さんの言葉を借りれば人間力を高めていくという、そのことは非常に大切なことです。さっき、学校教育課長さんが言われた、なぜ学ぶのかっていうこと自体が、やっぱり、現場も親も子供も、何か判然としたまま、とにかく義務教育だから学校行かないかんだみたいなところもあろうかと思えます。そういうことも一つは、これは私の持論ですが、学ぶっていうことは、学んだことがそのまま役に立つか立たんかっていうことではないと思うんです。例えば、高校で習った微分積分なんかはもう、頭が痛くなるような領域です。そんなんが社会に出て必要なんかってこう言うけど、何かそういうことに出来る出来ないというふうに取り組んでみるっていうようなことを、それは、単なる知識の学びじゃなくて、これから人生を歩いていく上で出来る、出来ないか、出来そうにないから役に立たんからもうせんとかうってっていうようなことを、一つのことを学んでいく中で身につけていくことかなと思います。

そういう意味では、漢字検定と英検の費用を市が見てくださってる、非常に有難い。先ほども出てました、漢字検定を受けるため家でちょっと勉強し

ようかなと。前に県の教育委員会が回ってこられたときに、西海市は非常に道徳的にも人間的にも地域が学校に対する態度も、他よりずっと素晴らしいです。ただ、家庭学習の時間が非常に極端に他所より少ないのが西海市ですってこう言われました。私そのときに、おっしゃってることはよく分かりますって、家庭内学習が少ないというのは分かりますが、家庭内の学習が少ないっていうことは何かと言ったら、ただ勉強をしないというだけじゃなくて、家族と過ごしている時間が長いんですよって。だから、一気にそこら辺こう、家庭内学習の時間を持って言うてもご飯終わったら、それぞれの部屋に戻って行くとか、ばらばらにご飯食べてるっていうようなことが本当にこう、学力上がってもそれ教育なんかってこういうようなことあろうかと思えます。ですから、そういう面で検定を後押しして下さってるっちゅうのは非常にありがたいなと思えます。

この間、関東の知り合いから電話かかってきて小学校三、四年の子供だと思えますけど、英検3級にとおってねってこう言われました。すごいやんて言うたら、こっちでは、しょっちゅうあることなんだっていう、今見たら中学校ぐらいの英語力なんですよね。それが小学校三、四年で、もうそれがざらだって言われて驚いたけど、そこまで子供がほんとにしたかったら応援したらええけど、ちょっと、お互いしんどいもあるんじゃないかなって思いながら聞きました。そこら辺行くと本当、西海市は人間性豊かな中で学んでいけると、そこにもう少しお勉強に取り組むきっかけを私たちに何かお手伝い出来たらなというように感じています。以上です。

市長

学力向上ということですね、ややもすれば点数主義ということになるんですが、学力のですね、分けて考えなくちゃいけないことは、学力というのは何か、基礎学力と全体としての学力というのはやっぱり分けて考えなくちゃいけないと思えますね。その中で知識というものがありますけども、いや本当の知識とは何だろうと。今、インターネット、スマホもこれだけ普及した中で、実は調べれば分かるけれども、それは本当の知識としてなってるんだろうかと。単なる情報で終わってるんじゃないかということがああるわけですね。やはり本当にやっぱり知識というのは身に付くものであるし、情報というのはそのときに知ってもすぐ忘れてしまう。意外と今の社会ですね、知識が豊かな子よりも情報処理能力が高い子がですね、結局、優秀とされてるんじゃないかという私はそういうところは思うんですね。

先ほど教育長が言われましたけれども、やはりあの、ふるさとを愛する心、こういうところは本当にやっぱりアナログだと思うんですね。人間の心の。そのために手計算する、それとまた漢字、しっかりとした日本語ですね、漢字をしっかり覚えていく、そういうところが基礎じゃないかなというふうに思っております。この町で学んだことに魂が入るということは、アナログ、

手計算して指を動かしてですね、それはある程度の労力も要するというようなことではないかなというふうに思っているところです。

今、西海市も学力テスト、標準学力テストがあるわけですがけれども、その中で一定の上昇は見えてきているところでもありますんで、最初、北島委員が言われたようにですね、点数で何でも測るのはいかがなもんかということ、ありましたけれども、やはりこう、去年までは20位ぐらいのですね、そういうところに居たら何とかこう上げなくちゃいかんと、やっぱりそうすることによって子供たちは、保護者の皆さん方も、西海市で学校に行ってますね、安心もできるんだろうと思いますので、それも最低限のところの基礎学力というところで、しっかりとやっていただきたいなというふうに思いますし、しかし、学力のほうも本来の目的とするところが、人と人のつながりをしっかりと、自分が学んだことでそれをちゃんと活用できる、そして、社会に貢献できるというようなですね、そういうところだと思いますので、そういうところもしっかりと押さえていけるようなこの学校教育であってほしいなというふうに思っております。

教育長

ちょっとシステムのお話をさせていただきますと、やっぱり西海市が独自に今やってるのは、学力向上スーパーバイザーなんですよ。退職された、行政経験のある元校長先生に来てもらって。他の所と違うのは元校長先生だから、校長先生を指導していただいたり、教職員の指導技術について直接指導していただいたり、スーパーバイザーをいただいて本当ありがたいと思ってます。悩みっていうか、中学校は4校ですから、1人で週1回ぐらい行けるんですけど、小学校が11校で2人ですので、割れば5.5なんですよ。だから今しっかりいただいているのをもっと有効活用するための手段としては、今ここで思いつきですけど、例えば中学校はやめて小学校3人で基礎の小学校をやっていくとか。他にも校長会でこの意見を聞かないといけないんですけど。それとか、予算を少し削ってでも、もう1人増やす方向で行くとか、とにかく今効果が上がってますんでそういうふうに考えております。先輩の力を借りると言うか、温故知新の温の部分ですね、さっき市長がアナログの部分で、今、徐々にですけど、効果が上がってきていると思ってます。もう一つは知新の分。課長の説明にもありましたけど、ICT機器の活用ですね。それからプログラミング教育の導入、このICT機器の活用の中には遠隔授業というのがあります、この遠隔授業が活用できれば、小さい学校の子供たちが大きな学校とつながって小さい学校ではなかなかできない意見の交流とか、そういうのができるのかなあと、そこも研究したいと思っておりますんで、温故知新のどっちも大切にしながらですね、今後とも頑張っていきたいと思っております。

寺本委員

まさに、スーパーバイザーの件、私も今発言しようと思って、教育長さんに言っていたいてありがたかったんですが、本当、今私お尋ねしようと思ったのは、足りてるのかっていうことをお尋ねようと思ったら、でも中学校は中学校で大切なんでどうにか捻出してでもやっぱり小学校を手厚くしていただくほうを今のお話の流れは、私はそう思います。そこには、傍から見ても、素人目に見ても、スーパーバイザー制度っていうのは、まずですね、学校の先生たちが、大先輩にそうやって授業のやり方組み立て方を習うことができるっていうことがあります。それによってですね、西海市に赴任された先生たちが西海市で教師やってよかったなっていうことも僕は非常に大切な部分だと思いますし、また、スーパーバイザーをしてくださる先生方も、何か退職したらもうそれで終わりじゃなくて、やっぱり自分がやってきたことを本当に生かせる場が開けてくるという意味でスーパーバイザーの先生たちにも大切な機会だと思います。そういうことがゆくゆくは子供たちにやっぱりわかりやすい授業、伝えられる授業という形で展開されていくことだと思いますんで、できれば増やす方向で市長さんもおられますんでよく聞いていただいて、本当に効果があるんだろうなと思って、その効果についてももう少しお尋ねしようと思っていたところでした。

学校教育課長

ありがとうございます。本当に学力向上スーパーバイザーは我々が言うのではなくて、現場の職員からの声も聞いております。我々も学校に訪問指導をするんですけど、その時に指導主事が話を聞いたり、実際に指導場面を見たりしています。やっぱり授業の時間、実際に教員というのは自分の授業を見てもらうっていうのは緊張するんですけども、それが定期的にあります。中学校の場合は週に1回来るわけですから小学校先ほど教育長が申しましたように、1人のスーパーバイザーで6校担当してますので、2週間に1度しか行けないっていうときもございます。授業を見ていただきながら、また行政経験もあらわれてずっと授業の指導をされてきた方なので、校長としてだけではなくて、行政で指導してた指導主事の視点から具体的に今のめあてを立てるタイミングはあれでよかったのかと、めあての文言は子供に本当にそれが伝わるのか、そういったレベルでの指導がなされている。それによって最初スーパーバイザーが初めて入ったときには、ちょっと敬遠しがちな雰囲気もあったんですけど、今では自分から資料を作りましたって持ってくる教員が増えてきたって、スーパーバイザーが言われています。そんな具体的な変化がございます。また、校長先生をされた方でもあるので、校長もやっぱりぴりっとします。校長はなかなかふだんいたらぴりっとないんですけど、先輩が来られるとぴりっとした雰囲気っていうのは、学校の雰囲気もまた引きしまったという意味でですね、本当にいいなあと思っているところです。願わくばですね、更に充実していただければ、これに優るものはないな

と思っています。

北島委員

せっかく市長さんがいらっしゃるんで、先ほどのふるさと教育を少し広げたいなと思ってですね。実は昨日ちょうど長崎県下の福祉施設の理事長が集まる会議があって、五島のほうからも3名ぐらいお見えになっていらっしゃいました。私どもの福祉業界のほうでは本当に人材の確保が難しいという状況がありまして、特に五島列島のある島の先生だったんですけども、お話しなされたのは、いや、いい子たち居るんだよと。高校を卒業して是非、来てもらいたいなと思うんだけども、全員島から出てしまうんだというお話をされてました。仮にその役場での採用枠があったとしてもそこに残れないと。全員がまず島を出てしまうというお話があったりとか、島原の施設のほうでは、これは成人というか卒業されて就職されてる方たちですが、みんなこぞって福岡のほうに行きたいっていうふうに言うとかですね、ご存じのとおり長崎県自体が流出県としてはワーストですし、特に長崎市は全市町のワーストということで、非常に流出県っていうところばかりが有名になっているわけなんですけども、そういった中でやはりこの地域に残る子供たちをほんとに育てないといけないんだなあというふうに思います。

先月ですか、中学校のほうから子供たちが福祉体験に来てくれました。本当に一人一人、非常に純な心を持った、お年寄りとの接する風景ですとか、そこの中から学んだことを感想を言ってくれるんですけども、そういったことも聞いてますと、非常に豊かな心と人間性持ってるなっていう子供たちばかりですね。最後お別れの時にはもう内定ですからねって言ってですね、その日は終わったりするんですけど、本当にその高校卒業して内定どおり来ましてって言えば1番いいんですけど、なかなか本当そうはいかない状況の中で、是非、いわゆる地域に対する愛情を育てていく教育をどんどんどんどんいろんな角度から続けながら、そしてふるさとで暮らしていける、またそういった地域をつくっていくということもですね、いろんな施策の中で、是非協働連携しながらお願いしていきたいなというふうに思っているところです。よろしくお願いします。

市長

まず1点はスーパーバイザーの件でございましたけれども、事あるごとに学校教育課長、教育長からもお聞きをしているところでございます。今その現場のほうからですね、私も最初これ運用したときに、いや、教員のほうがどちらかと言うと煙たかとかやなかかなというですね、そういう考えを感じもあったんですよ。ただあの、やはり1年間を通してやってる中で学校教育課長のお話の中にありましたけれども、その分かりやすい授業、そして伝える授業というのをですね、しっかりとこれを作っていこうというそういう学校の姿勢、先生の姿勢が見えるということ、そして今、自らですね、指導

案というか、それをちゃんと作ってそしてそれをスーパーバイザーのほうに確認してもらおうでしょう。そういう形でね、非常にこう自発的になってきたというのは一ついいんじゃないかなというふうに思っております。

それから、やはり北島委員が言われましたけれども、話の中で、本当思うんですけども、学力というのがですね、本当はイコール人間力という形につながっていくような、トータルした中でしっかり持つて人間、心豊かな人間、感性豊かな人間、そしてお互いにあの仲間と学び合って、向上していこうとするそういうもの全体、それを全部含んだ中での学力と思うんですけども、そういう中で話は戻りますけども、基礎学力の部分はしっかりとやっていただければならないと思いますし、これからの西海市の子供たちが将来ですね、自分のふるさとをちゃんとふるさと自慢で、自分の言葉でみんなに伝えていけるような、そういう子供たちが育っていけるような学校の教育であってほしいなと思っております。それは当然市長部局のほうとか、当然、一緒に協力し合いながら、進めてまいりたいというふうには思っております。

北島委員

学校教育課のほうにちょっと聞きたいんですけど、今ほんと先生方が頑張っていたいてですね、子供たちのために、本当、新しいことも含めて、いろいろ取り込みながら取り組んでいただいていると思います。また一方で働き方改革というところもございますし、また、新しいそのやり方っていうかですね、新たなことを覚えなくちゃいけないという先生方の負担とかもあるんじゃないかなというふうに思いますが、そういったところの対応とか順応性とかいうのはいかがでしょうか。

学校教育課長

ありがとうございます。やっぱり働き方改革の指針が示されて、いかにそこを改善していくかっていうのは大きな課題でございます。実際に目安としては45時間っていうのを国が示しましたけれども、今基本的にその80時間を超えると、もうその、本人の疲れがあれば産業医との面談も含めて検討しなければならない。実際その繁忙期っていういまいましようか、成績を処理する時期になったりとか部活が始まったばかりのときとかではですね。事実上その80時間を一時的に越えるっていうこともございますので、いかに業務を精選するかということですね、一つの形としては部活動指導員も入りまして、その部活に対する負担も少しはですね、一緒になって出来ますので、質の向上プラス、先生方の援助もできるようなシステムもできております。

また学校行事等も減らしながら、できるだけ勤務時間が超過しないようにっていうことでの取組も進めているところです。また、若者の初任者につきましてはですね、初任者研修の見直しもなされておまして、現在、やっぱり悩み事があつたときに相談ができるようなメンター、メンティーの関係を作って、自由に話をしながら、互いにですね、研修を進めていくという学校

に研修を返してOJTですね、そこができるようなシステムをつくるということでの働き方改革もなされているところでございます。何しろそんな手続をしながら少しずつ進めていこうと思っています。

寺本委員

西海市AIプランじゃないんですけど、AIの時代が来てまして、このいただいた、今日のレジュメの成果と課題という中の課題のほうに各学力調査の結果から「文書で説明する、自分の考えを書くこと、書く問題が苦手であることが見えてきた。」ここ非常に注目して大切なところだと思うんです。

AIの時代がますます進んでいくとそれこそ情報処理とかそういうのはもう人間じゃなくて、コンピューターがやっていく。多くの仕事が今と違う仕事になっていく。そうなれば、今まで、人間がやれていたことがもうコンピューター、機械が取って代わることが増えると、本当に生きる意味っていうのが具体的に問われてくる時代が迫っていると思います。ですからそういう意味でも、自分の考えをちゃんと表現できるっていうか、そういう思考をやったり施策をする機会、またそこら辺を苦手であるなら余計のこと力を入れて進めていただきたいなと思います。以上です。

北島委員

関連してなんですけども、西海市のほうでは、以前より西彼杵高校のほうで、学びの共同体アクティブラーニングという実践をされてる中で大瀬戸中学校とかですね、近隣のほうにも波及を試みられてるっていう話も聞いておりまして大変うれしいなというふうに思います。そういった中で、ちょっとこれ、私事なんですけれども、甥っ子が小学校6年生で、今一生懸命北中を目指して頑張っているんですけども、ほとんどその課題っていうのは作文ばかりなんですよね。作文ばかりさせられると。それからこれも有名な大濠のほうの高校なんですけども、基本的な通常の授業というのはほとんどその学校、家庭でもってこらす中で、ほとんど学校の授業ってプレゼンテーションの授業が中心で、やはりその表現力とかコミュニケーション力とか、そういったことが非常に今後力を入れていかないといけないということでやられてるっていう話をちょっと私の関係する方の話から聞いております。

そういった中で、全国的にも今、コミュニケーション力の向上ということでは大阪大学のコミュニケーションセンターというところの平田先生が中心になられて、いろんな学校のほうでもそのコミュニケーションの授業っていうのもされておられるというふうにも聞いております。それぞれの地域や学校が独自でやっていければいいかなというふうに思いますけれども、ぜひ西海市においてはそういった先駆的な取組もありますので、こういったことを西海市の全体の学校のほうでいろんな形で取り組んでいただければなとちょっと期待をしておるところです。よろしくをお願いします。

教育長

お二人の意見がありましたけれど、私は今、P T A、家庭と連携して三つのことをしないといけないと思って。一つは本を読ませる。それから、余暇を与える、ゆとりを与える。最後はスマホ、携帯から引き離す。この三つをP T Aの力を借りながら。何でそういうことをしたいかという、ただ一つ、子供たちに考える時間を与えたいわけなんですよね。昔偉い人が「我思う、ゆえに我あり」って言いましたけど、人間とA Iを比較して人間が優れていることは考えることができるっていうところなんです。そのためにやっぱり考える材料、本を読ませる、余暇、時間を与える。我々だって時間がないときは考えませんよ。時間を与える、それからその時間を最も浪費させるスマホや携帯から引き離すっていうのを。もう1回言いますとこれを進めていけば、心豊かな子もできるし、A Iに負けない子もできるし、それから、学力も上がると思っております。

市長

はい、今日はいろんな貴重なご意見をいただいたところでございますけれども、やはり最終的には子供たちのですね、どういう子供たちを西海市で育てていけるかということが大事なことだろうと思うんですね。そのためには、今教育長が言われた読書というのがですね1番じゃないかというところに落ちついたんじゃないかなと思います。まず子供たちが持って生まれた感性というのはあると思うんですけどね、何にでも興味を示す、そして何に対しても感動するというですね。持って生まれた個性もあるかもしれないですけども、やはり、教育環境の中でやっぱり興味を持たせる、また、感動する心を育むというような、そういう教育が今求められているのではないかなというふうに思っております。

やはり、ただ知識だけ詰め込んでですね、人に対して何の理解もない、自分さえよければいいというような子供が育っては、これは将来にですね、西海市の財産となるものもならないということで、今、教育長が「我思う、ゆえに我あり」という言葉がありましたけども、もう一つ「人間は考える葦である」とパスカルの言葉もありますんで、そういうことも含めて、やはりこれからですね、西海市のふるさとを愛する子供たち、しっかりと育てていけるような学校教育、そして学力向上に努めていただきたいというふうに思っております。何か駆け足でありましたけれども、時間が来たようですので、ここでですね、事務局のほうから説明をいただきます。

総務課長

はい、本日の2件のテーマについて活発な議論をいただきました、ありがとうございました。次にレジュメの3番目になりますけれども、その他第2回会議についてでございます。これにつきましては、一旦、教育委員会で調整をいただいたところでありますけれども、ちょっと改めて提案をさせてい

ただなければいけない事情がありますので、教育総務課長のほうからご説明をしていただきます。

教育総務課長 はい、失礼します。本日、定例教育委員会の開催の際、第2回総合教育会議の日程等について調整をさせていただいたところであるんですが、11月29日金曜日の午後からでどうかということで提案をさせていただいております。ただ、総務部のほうから、11月29日については定例市議会が招集されるのではないかっていうそういった情報も入っておりますので、よろしければ、11月29日午後、まず初めに1時半ぐらいから定例教育委員会会議を開催をさせていただいて、そのあと総合教育会議を開催ができないかというふうなところで考えております。日程につきましては11月29日の15時からということで提案をさせていただきます。また議題につきましては、毎月教育委員さん方が定例教育委員会に参加していただきますので、その際に、教育委員さん方のご要望等ご意見等を聞かさせていただいて、議題については決定をさせていただくということで提案をさせていただきます。

総務課長 ただ今教育総務課長からご説明のあった日程の時間の変更ですけれども、よろしいでしょうか。西海市議会がですね、議会ごとに12月といえば11月の最後の金曜日、12月または12月の最初の金曜日が市議会のスタートというのが慣例になってまして。かなり招集日になる確率が高いということで、時間の変更のご提案をさせていただいたところでもあります。一応この予定でよろしいでしょうか。はい。それでは最後になりますけれども、次回の第2回会議の議題の件についてなんですけれども、今回、コミュニティ・スクールについてと学力向上についての2件について協議をいただいたところですが、委員の皆様の中で次回の議題について何かご意見等ございましたらお願いしたいと思います。もしよろしければですね、私どもと教育委員会の事務局のほうと協議をして、またご報告をさせていただきたいというふうに思いますけれども、よろしいでしょうか。それではこれもちまして本日の日程を全て終了いたします。長時間にわたりご審議ありがとうございました。お疲れ様でした。

(閉会)